

第 29 回（教育）分科会報告書

1. 開催日時：平成 28 年 12 月 14 日（水） 15：30～17：00
2. 開催場所：社会福祉協議会 3F 会議室
3. 参加者（所属のみ）

あおぞら、筑後特別支援学校、ふるさと、南筑後保健福祉環境事務所、子育て支援課、陽だまりの里、さら、みんなの館、あるくとぷらす、つくし園、HIRO キッズ、福島保育所、黒木小学校、上広川小学校、立花中学校、八女市（福祉課、子育て支援課）、リーベル

4. 実施内容

○講演 『発達障害支援の在り方とは？』

講師 福岡県発達障害者支援センターあおぞら 公文眞由美センター長

○講演概要

通級指導教室での経験をもとに発達障害児支援についてお話しいただいた。支援においてはアセスメントが重要であり、




伝えたときにどんな分かり方をして
いるか、伝わり方の様子を知ることが大切である。診断は大切であるが、ADHA だからといって ADHD の本ばかり読んで理解するのではなく、100人いれば 100 通りの状況があるため一人一人に応じたやり方を見つけていくことが必要である。現場で実践できる工夫の仕方を交えながら説明

いただいた。体験したことは身につきやすく、逆に言うと抜けにくいといった側面があるため、正しいことを教えていく必要がある。言葉だけで伝えては伝わらないことが多く、時には待って、できたことをほめていく関わりをもつこと、ソーシャルスキルについては日常の中で実践していくことが重要であることを教えていただいた。

個人への関わり以外にも保護者に対する支援としてペアレントトレーニングを紹介され、保護者、関係機関連携においては互いに尊重し合うことの必要性を強調された。

最後に受動型の子どもたちについて触れられた。勉強はそれなりにできる、主体的にはできないが誘われたらできるといった何となく適応できている子どもたちが存在すること、



社会に出て自主性が必要になって困る場合がある。友人は社会までついてくることはできず、友人がいるからで終わらず拾い上げていくことが必要である。

○意見交換

事前アンケートで寄せられた4つの質問に答えていただき、その後フロアから提出された質問について話題を広げながら意見交換を行った。LDを持つ児童に対しての課題の見極め方、関わり方の工夫として文字の圧迫感を減らすために紙を折って一つずつ学習できるようにすること、時間を短く区切ることを紹介された。大声で泣くことが多くなっている児童に対しては平常時にその子に対する感想やよいところを言ってあげることが伝えられた。行き渋りの子どもについて



では、家にいて何もせず役割がないことが多く、家事などの役割を与え小さなことでもできたことをほめていく、1枚の紙でも500枚になれば厚くなることに例えながらお話しいただいた。小学校において支援が必要な子どもをまわりの子どもたちにどのように理解されるかとの問いに対して、学年にもよるが、得意、不得意がみんなにあるというように同じように扱っていくスタンスが大切であることを前提に、高学年になると周り



も何となく苦手なことが分かっていると、実際にクラスの中で自身のことを表現しうまくいった事例について紹介いただいた。通級は水泳が苦手な子どもがスイミングスクールに通うのと同じことという言葉が印象的であった。最後に秋山座長、公文センター長より全体のまとめを行い終了した。

具体例をもとに分かりやすく解説いただき満足度の高い研修となった。